

「Talk on Together 2009～第1部」

▼進行：浦和レッズ・オフィシャル・マッチデー・プログラム（MDP） 清尾 淳氏

▼出席者：橋本光夫代表 信藤健仁チームダイレクター（TD）

橋本代表：本日は天候が非常に不安定な中をお越しいただきまして、誠にありがとうございます。厚く御礼を申し上げます。早速ですが、私の方からクラブ、チームの現況を報告し、経営の基本スタンスについてお話をさせていただきたいと思います。

8月2日の埼玉スタジアムでの清水エスパルス戦は、連敗の中で迎えたホームゲームでした。残念ながら勝利を収めることはできませんでしたが、この試合でスタジアムへ駆けつけてくれた多くのファン・サポーターの皆様の「Pride of URAWA」のロングコールは、私に改めて浦和レッズというクラブの位置づけと、ファン・サポーターの皆様の熱い思いを認識させ、私自身の責任の重さを痛感させるものでした。気が付くところの試合中、私自身は用意されたシートに座っていることができずに、2時間、立ったままでピッチを見つめ、選手のワンプレーワンプレーを祈るような気持ちで見つめておりました。

私自身は浦和レッズに来て3ヵ月が過ぎましたが、浦和レッズを支援してくださっている多くのパートナーの皆様への表敬訪問、あるいはスタジアムでのファン・サポーターの皆様との会話を通して、改めてレッズを支えるたくさんの人々のパワーを感じています。特に冒頭に申し上げたスタジアムの声援は、ピッチ上の選手だけではなく、「浦和レッズ」というクラブに対するサポートでもあり、私自身の背中を押してくれる温かい激励であると受け止めております。同時に、4月の就任会見で、「浦和レッズはより地域に根差し、地域のシンボルを目指す努力を続けていくべき」とさせていただいた方向性が間違っていないことを確認できた3ヵ月でありました。浦和レッズが地域や、ファン・サポーターのためにあり、地域の公共的な存在として、地域に活力を与え、世界に「浦和」を発信することができるよう、微力ながら役立ちたいと考えておりますので、引き続き皆様のご指導、ご支援をよろしく願いいたします。

皆様から暖かいサポート、激励を受けながら、最近、新聞報道やクラブのホームページを通じて届けられるメッセージの中で、スタジアムでの運営に関する問題や、選手の移籍問題などでご心配をおかけしていることを、高いところからありますが、深くお詫びを申し上げます。

本日は、浦和レッズの現況や、チームの現況と今後について、信藤チームダイレクター（TD）やフィンケ監督も交えて、皆様へ直接お伝えできる絶好の機会と考えております。後ほどTD、監督から、チームに関する詳細の話をさせていただきますが、事前に皆様からお寄せいただいたご質問やご意見への回答を含めて、私からクラブとチームの現況と、経営に関する基本スタンスについてお話をさせていただきます。

最初にチームの現況ですが、昨年の反省を踏まえ、今シーズンはチームマネジメント体制の見直しを踏まえ、信藤TD、フィンケ監督を迎え、新たに迎えた「レッズスタイル」「強く

て魅力あるチーム」「人もボールも動く夢のあるフットボール」の構築元年と位置付けてスタートを切っております。ピッチ上の変化については感じ取っていただいていると思いますが、チームの改革、レッズスタイルの構築は一朝一夕でできるものではなく、ファン・サポーターの皆様には、勝敗の結果にとらわれることなく、戦術の浸透などの過程を暖かく見守ってほしいという願いを、就任時にも申し上げました。従って、シーズン当初から言われているとおり、今シーズンは「数値ノルマ」は課していないのが現状であります。「数値ノルマ」はありませんが、もちろん「勝ち」にはこだわります。可能性のある限り、一つでも上を目指しますし、優勝を目指しまして、日本・アジアでも随一のクラブになる目標を、いささかも変更しているわけではありません。もっとも重要なことは、直近の試合で勝つことではなくて、「レッズスタイル」の構築を目指すという年初に設定した軸が、ぶれることがあってはならないということです。

繰り返しますが、浦和レッズは、強くて魅力のあるチーム作りを続けます。私と、監督とTDの三者で、チームの基本的なことについて確認する、協議の場を設けてチームマネジメントを行なっております。言葉の問題、メディア対応などで、試行錯誤している問題がありますが、必要な修正を加え、今後もフィンケ監督、信藤TDとのコミュニケーションを取り、チームをサポートしていく覚悟でおります。

例えば、アレックス選手の移籍についても、三者で協議し、最終結論に至っております。本人の希望を考慮すると同時に、本人にとって、よりベターなオファーとなるよう、信藤TDが名古屋グランパスサイドと交渉し、フィンケ監督の意見も聞き、最終的には三者で合意した上で、移籍を決定しました。アレックス選手には長年レッズで活躍していただき、寂しい部分はありますが、本人の希望がかなったものであり、ぜひ新しい天地で活躍してほしいと期待しております。

次に皆様から、「補強」について色々ご意見をいただいておりますので、このことについてお話をさせていただきたいと思っております。クラブ全体の経営状況は、世界的な経済環境の悪化という影響もあり、非常に厳しい環境となっております。収入は昨年と比べ、残念ながら若干減少する見通しであります。収支面では前年並みの確保を目指しております。現在、クラブスタッフ一丸となって、さらなる収入の増大と、徹底的な費用の抑制に取り組んでいるところであります。そのような環境の中であって、チーム強化費は前年並みを確保し、減少させていないのが実情でございます。現時点で残されている予算には限りがございますが、予算の枠内で、選手補強に関する「金庫」は開けられていると理解をいただきたいと思います。

例えば、ヨーロッパでプレーする代表クラスの選手を獲得するということは、確かに難しい部分がありますが、「レッズスタイル」の構築に必要な、戦力アップにふさわしい選手の獲得に関する検討は、現在もTDが中心になって継続しているとご理解をいただきたいと思います。

今、チームの運営の部分で、クラブの経営状況について若干触れましたが、収入面で最も

大きなウエートを占める入場者数の状況について、先般新聞報道がなされましたので、簡単に現在の状況について皆様にご報告申し上げます。2009 年度の入場者数は、8 月 2 日終了時点で 10 試合を終えて、1 試合平均 4 万 4,652 人です。この段階で、昨年はまだなかった駒場スタジアム開催試合が 1 試合含まれております。昨年の同時期では 4 万 9,809 人であり、マスコミの報道ではこの数値を比較し、1 試合平均 5,000 人減という報道がなされております。埼玉スタジアムでの開催試合の平均で見ますと、1 試合平均 2,282 人減っているというのが現在の状況であります。入場者の減少につきましては、さまざまな要因が考えられますが、「強く魅力あるチーム」と「レッズワンダーランド」作りが必要不可欠と考えております。「WONDER シート」などの新しいシートの提案・発売や、シーズンチケットを保有いただいている皆様の来場履歴の分析などにも着手しておりますが、ホスピタリティ向上に向けた施策について、さらなる検討を継続していきたいと考えております。

就任以来、チームの重要性、ホームタウンの重要性、経営基盤の強化の三点を掲げ、組織の在り方を検討してまいりましたが、去る 8 月 1 日付けで組織の改正を実施いたしましたので、簡単に皆様にご紹介をいたします。

まず一つ目のトップに関しましては、トップと、ユース・ジュニアユースの結び付き、連携を強化するために、ユース・ジュニアユースを TD の下に置くことといたしました。合わせて、スカウト部門も TD の下に入れて、TD の役割を明確にいたしました。

二つ目のホームタウンの推進に関しては、地域での取り組み強化をさらに推進するため、新たにホームタウン推進部門を新設し、この中に講演会や、地元商店街との連携を図るホームタウン活動、レディース活動、ハートフルクラブ活動、そしてレッズランドの 4 機能を集約いたしました。これら 4 つの機能は、浦和レッズが地域に根差すために、中軸となって活動する必要がある業務と考えております。

三つ目の経営基盤の強化に関しては、営業力の強化を図ること、特にマネジメント機能の強化を図ることが必要と判断し、営業部門を営業 1 部と営業 2 部に分割いたしました。営業 1 部はパートナー担当で、地域を初めとする企業の皆様とのコミュニケーションを通じて、パートナーとのお付き合いをさらに深めていくつもりです。営業 2 部はマーチャンダイジング、グッズ担当で、独立させる形を取ることでファン・サポーターの皆様親しまれ、喜ばれるグッズの企画・開発・販売を迅速に実施できるように組織改正を行ったものでございます。

次に、いろいろなご心配をおかけしております、トラブルに関連して若干のご報告をさせていただきます。埼玉スタジアムでのテレビクルーとサポーターとの暴力事件や、アウェイ戦でのサポーターの横断幕による広告看板を覆う事件が発生いたしました。いかなる場合でも、スタジアムで決められているルールを破ることや、暴力は許されないということを確認したいと思っております。テレビクルーとサポーターの事件に関しては、サポーターの大切な旗が破れたことが発端ではありますが、開催者として、スタジアムの設営面や、トラブル発生後の対応面で不十分な点もあり、責任を感じており、フジテレビ、ファ

ン・サポーター、関係各位には、改めて心からお詫びを申し上げます。事件は警察で調査中であり、最終的な事実関係は正確に把握できておりませんが、再発防止の具体的なアクションは、既に7月からスタジアムにて実施しております。本件に関しましては、6月13日にトラブルが発生した時点から、クラブは事実関係の調査を行うとともに、フジテレビを初め、Jリーグ等の関係各位にも報告し、粛々と改善を図ってきております。事件後、すぐにフジテレビから警察に被害届が提出され、捜査にかかわる重要な事項となったため、発表は控えておりました。今後は、捜査の進展を見守りつつ、サポーターとも話し合いをした上で、対応を検討していくつもりでございます。

7月にいくつかの新聞にて、「相手サポーター歓迎」という報道が出たことを受けて、ホームページ上で説明をさせていただいております。確かに、モンテディオ山形戦のNDソフトスタジアムでの街のホスピタリティは地域の特徴を存分に示していたと思いますが、それぞれのクラブの歴史、文化、地域状況が異なり、それが浦和レッズに適用できるとは考えておりません。

日本のスポーツの中でも、Jリーグの最大の特徴はホームタウン制であり、ホーム&アウェイでの戦いが、多くのファン・サポーターを育ててきたと認識をしております。浦和レッズのスタジアム内においては、「レッズワンダーランド」を、今後も徹底的に追い求めるし、これが浦和レッズの最大の強みの一つと理解しております。「レッズワンダーランド」はスタンドに多くのファン・サポーターが詰めかけ、真っ赤になって選手と一緒に戦うことにより実現し、そこで感銘や、感動や、勝利への執念が芽生えると考えております。埼玉スタジアム周辺のいわゆる美園エリアも「All Come Together」などの取り組みを通じて、関係者の多大な協力も得ながら、赤く染まってきました。これも「ワンダーランド」の一部と考えております。一方、スタジアムの安全という切り口では、相手サポーターにもレッズ側と同様のホスピタリティを行なうべきで、公平な安全の提供という意味で、相手サポーターへのもてなしは必要だと考えております。

例えば、真夏の暑いときに、アウェイ側にも日陰や、暑熱対策が必要であり、もてなすべきであると考えております。ホスピタリティの向上が、新しいファンを生み、リピーターを増やし、入場者数の増大につながると考えているというのが、発言の真意でございます。最後になりますが、就任以来三ヶ月が過ぎ、私自身がこの間に感じたことや、クラブの現況についてお話をさせていただきました。サッカーに未経験で、プロスポーツの知識もなく、長年メーカーで育った私に対して、浦和レッズの将来を不安視するという多くの声も聞いております。三ヶ月間だけではありますが、先輩たちが築き上げた浦和レッズの大きさと、存在感を認識させていただきました。皆様の声に真摯に耳を傾けながら、浦和レッズの発展のために尽くしたいというのが、今の私の素直な気持ちでございます。2007年からの三カ年の中期計画、「AAA（トリプルA）プラン」も、今年が最終年となりますが、来春までには「ポストAAAプラン」を策定し、再びアジアNo.1を目指すことを謳い、皆様に紹介したいと思います。今年度も半分以上が経過しておりますが、残された期間で、チーム

は「レッズスタイル」を貪欲に、勝利を目指した戦いに結び付けること、経営面でも、地元浦和に軸足を置いて、自立した、安定した基盤を作ることを目指して、改革の推進を図ることをお約束し、ご挨拶、並びに私からの現況報告とさせていただきます。
ぜひ、一緒になって強い浦和レッズを作ることに協力いただきたいと思います。

清尾氏：皆さんから多くのご質問をいただきまして、先ほどの橋本代表のお話しの中にも、質問事項を全部読まれた上で、短い時間でこれだけはこの内容を話されたと思います。私も全部拝見させていただいて、当然全部（にお答えするの）は無理ですので、共通して、ぜひここは聞きたいところだろうなということをもとめてみました。先ほどの代表のお話しの中にもかなり網羅されていますので、極力短い時間で、効率よくやっていきたいと思えます。

まずは信藤 TDに聞きますが、ここまでのチームの試合内容と成績、肝心な成長ぶりなどについての評価をお願いします。

信藤 TD：今年がどういう年なのかということ、まず我々は考えなければいけないと思います。当然ファン・サポーターの皆さんは、ずっと勝ち続けて、そしてずっと優勝争いの中の1ポイント、2ポイント差のところに居続けるということを望まれていると思います。ただし、私たちが今シーズン、何をしなければならないのかという礎（いしずえ）作りの部分は、絶対に忘れてはならないところで、フィンケ監督に今シーズン来ていただいて、年代的には若い選手たちも投入して、ベテランたち、そして少し隙間（若い選手とベテランの選手の間に）が開くのが今のレッズの現状です。その中で、ベテランと若手をうまく融合させて、開幕戦から、開幕のアントラーズ戦は悔しい戦いでしたが、その後はやろうとしている監督のサッカーを、みんなが必死になってトライをして、ここまで来ました。ここ最近の（リーグ戦）3連敗というのは次へ向けての課題となりますけれども、立ち上がりからやってきたサッカー、そして選手たちの活躍、見せたパフォーマンス、それと代表選手がいなくなったナビスコカップでの若い選手の踏ん張り、こういうものは、十分に評価できると思っております。

もし、昨年と同じようなやり方をしていたならば、この時期で山田直輝は、代表にピックアップされていないでしょう。それから原口元気、ここまでの自分のパフォーマンスを徐々に徐々に上げて行って、Jで力を発揮するまでになっていなかったと思っています。あるいは高橋峻希もそうですし、永田拓也も試合で使われています。多くの若い選手たちが、今シーズン、フィンケ監督の下で、実戦で力を蓄えることができました。ただし、その裏では「補強はどうなった？」という声が聞こえてくるのも事実です。これは、今シーズンの初めに、監督ともしっかりと話をしました。今年やるべきことは何なのかということ、それから今レッズが持っている予算の中で、ヨーロッパの超一流を取ってくるには、申し訳ないですが（予算の）桁が一つ違います。1億のところ、10億、20億、30億、40億の

話になってきますし、もっと上の選手になると、100億ベースということになります。これは将来レズがそこへ行ければいいとして、現実をやっぱり見たときに、立ち上がりリストアップをしたところで、監督に「今シーズンの最初は、若い選手たちが上がってくるのを利用して、今いる選手たちをあらゆる面であらゆる面を変えていこう」と話をしました。

それは生活習慣もそうですし、トレーニング、試合、回復、そして休息と、あらゆるサイクルが大幅に変わりました。中でやっているセッションも大きく変わりました。それでここまで来ました。僕はここまでフィンケ監督がやってきたことに対して、まったく不安はありません。あとで、また将来に向けて描いている絵というのをすべて話せばいいんですが、時間がないですね。僕は確信をしています。必ず、ある意味華やかで、そしてしっかりとしたベースを持って、誰が出ててもスタイルは変わらず、見ている人が毎試合楽しんで、将来的にはその中で勝ち続けていけるチームになっていくベースだと思います。

清尾氏：今、補強の話も少ししていただきましたけれども、必ずしもこの夏のウインドーの開いている時期に取らなければいけないと、決まっているものでもないと思いますが？

信藤 TD：そうですね。ずっと続けてやっていることです。これは調査して、リストアップして、そして監督と検討をして、そしてタイミングを計って、予算を考慮しながら、ということですね。補強というと皆さん、いい面ばかり考えられると思います。ですが、補強は、タイミングを間違えると、今までいた選手を消すことにもなりかねませんし、あるいは、補強によってプラスもあるでしょうけれど、マイナスの材料もあります。それは当然、あらゆることにプラスとマイナスがあると思います。そのようなことをすべて考えたときに、僕は監督ともいつも協議をしています。そんな中で実際に、今大きな補強がないということだけで、補強をずっとできないままかということそうではないし、ずっと続けて、リストアップと監督との協議は続けているということなんです。

清尾氏：多分皆さんが一番期待されているのは、試合の度にスタメンが代わる左サイドバックだと思うんですけどね。そのところを補強する可能性があるのかどうか、そこを本当に突っ込んで聞きたいところでもあると思います。

信藤 TD：左サイドバックは、今、平川忠亮が帰ってきましたよね。それに永田がこんな早い時期に出てきている、細貝 萌というすごくユーティリティな選手が、どこをやっても今シーズン力を発揮している、そういう状況の中で、左サイドが薄い薄いって言って、それに対して何かというアプローチが、本当に正解なのかどうかというのは、考えなければいけません。左サイドで何かをする選手ってというのは、それはもう貴重な存在だっていうのは分かっていますから、それはもうリストアップを含めて、立ち上がりの頃からやっていることです。ただ、そこで今どういう動きをしているかは言えません。

清尾氏：一部で、アレックスの完全移籍が決まってから、急に左サイドバックをあちこちに探し始めたという報道もありましたが？

信藤 TD：アレックスは非常に強い希望があつて名古屋へ行きました。それでメディアの方が、「左サイドの補強は？」って聞かれたときに、アレックスがもう名古屋に行くことが決

まっていた中で、僕が「もう左サイドの補強が必要ありません」と言ったとしたら、アレックスがどう思うのでしょうか？そういうようなことも、我々のメディアとの付き合いの中で起こっていることと言うのは、人を攻撃したり、人を迷わすようなこととか、できる限りはしたくない、でもそんな中で発言もしていかなければいけないですからね。

それから、補強や契約に関して、私たちが表に簡単に出すことは実際にはありません。なぜ話してはいけないかは、その人がもし表に出て記事になったら、華やかな発言として持ち上げることになるかもしれませんが、チームには選手が多くいるわけです。私の役割としては、そのような記事が出ることによって、中が見えてくることによって、どんな影響が及ぶか、そこまで考えなきやいけないことだと思います。

これからも、大事な核心のところでは僕の口から、補強で今どういう動きをしているか、あるいは契約の話でこういうところが進んでいるということが出てくることは、多分ないと思います。それでも、いろいろなところで、クラブとして将来、どういうところでやっているのかっていうことはしっかりと言います。ですから「信藤 TD」っていう名前が出たところでいろいろなコメントが出てきたことは、僕の発言ですから、それは安心してもらって構わないと思います。

清尾氏：目標について先ほど橋本代表からいろいろなお話しがありました。ちょっとお話を聞きたいのが2点ありまして、「数値的なノルマというものはない、あくまでもチームの構築である」とありましたが、優勝はしなくてもいい、あるいはもう今年は諦めた、ということではないんですよね？

橋本代表：私の方からよろしいでしょうか。先ほどもお話しさせていただきましたけれども、例えば監督や、信藤 TD の評価をするときに、今年度が終わったところで何位の成績だったかということを中心して評価するということはありません。ただし、スポーツをやっている、勝敗のあるスポーツをやっているわけですから、選手たちは、勝つことを目標として、「レッズスタイル」の構築をやってくれているというのも事実だと私は確信しています。一戦一戦の試合に関しては、必ず勝つことを目標に取り組んでいます。その結果いい成績を残したい、そうやって選手が取り組んでいくことが、きっとファン・サポーターの皆様にも感動を与え、感銘を与えることになるだろうと思っています。だからその部分にはいささかもブレはないと私は思っています。

清尾氏：今のお答えいただいた部分を含めて、代表と TD は一致していると思いますが、監督も同じスタンスでいらっしゃるのか、そして選手も同じなのかって言うところをお聞きしたいのですが？

信藤 TD：監督はもちろんその通りです。先のことをずっと考えておられる方です。それで、やはり目の前のことに対して、何かをやっていく、それは選手獲得もそうですけど、それをやっていくことによって将来的にはどうなるのかってことがはっきりしていないと、これは長いスパンでレッズのスタイルを構築していくということであれば、それを長く続けることはできないと思います。監督もそういう考え方で、今チーム作り、日々の一戦一戦

の戦いをやってくれていますので、長い目で見ているところはあります。

ただし、一番負けず嫌いなのは監督だと思いますし、そこで新聞などに出ているような（優勝をあきらめたというような）感覚はまったくないと思います。まず何よりも一戦一戦必死になって、緻密にチームを作り上げて、選手の起用に関しても、全体を眺めながら組織的なものを作り上げようとしているのが今の監督です。

清尾氏：選手はどうでしょう？選手とクラブの目標の認識にはズレはないですか？

信藤 TD：こういったところで話したことも（選手へ）伝わっていけばいいと思っていますし、シーズンの前に今年はいろいろな所を変えていかなければいけないというのは、監督からも出ていますし、僕も話をしています。そんなところを（選手に）普段やっているところから汲み取っていってもらうことができなければ、こちらから話しをしますけれども、日々のトレーニングのセッションがあって、その前後で選手たちは準備があって、回復があって、そんなところで改めてこちらから「今年はこのチーム作りを」という話をし、そこで納得できるものなのか、あるいは我々が普段接している中で、選手たちも「そうなのかな」って感じているものなのか、そこはすごくデリケートなものだと思います。表立って何か言うてはいませんが、そこは僕が感じたことは、これからもやっていこうと思います。

清尾氏：多分皆さんがいろいろ聞いていて、「え？」と思うのは、お金がないということ、特に監督の発言だと思うんですけども。先ほど代表の発言の中から、「そういうわけではない」と、「金庫の扉は開いている」ということでしたけれども、扉は開いていても中にいくらあるのかなと（笑）。その額を今言ってくださいとは言いませんけれども、そういう意味ではそこそこの選手は取れる用意はあるということですか？

信藤 TD：あの、社長の前に僕から。私たちが現場で何を一番やらなければいけないかという、確かに今シーズンの戦いはすごく重要です。皆さんもこれだけは覚えていてください、私たちは優勝を目指してないわけでもなんでもありません。とにかく、必死になってその戦いに勝っていくということにトライします。ただ、それだけでは駄目です。1年後、2年後のこと、それは中にいる人たちも変わるし、これは僕がこのチームにプロとして入ってきた理由もそこにあります。何年後かには（自分は）いないかも知れない、でも先を見ながらチームを作っていく限りは、人が代わってもチームが変わらないという状態にはならないので、それは続けていきます。そんな中で必要なのは、予算が今これくらいあって、来年がこれくらいあって、再来年がこうなるだろうという中で、この選手を獲得したら次はこういう選手をというように、どんどんつながりを持たせなければいけないので、そういう予想の中で我々はやらなければいけないというのは、監督の中にはあって、それは僕の中にもあって、社長にも理解してもらえらと思います。

清尾氏：先ほど左サイドバックの話でしたが、今は例えば日替わりのような状態になっています。もう少し鍛えて、十分その役目がこなせる選手になりそうだという人たちがいるとしたら、無理に今すぐ誰かを補強するということはないかも知れないということ

ですか？

信藤 TD：そうです。

清尾氏：その辺はまだ見極めというところですか？

信藤 TD：見極め中です。

清尾氏：お金の問題はともかく、ただ J リーグの中では、経営規模が一番大きい中で「予算がないので」という言い方をされると、違和感を感じる人も少なくないと思います。先ほど言われたような「超有名選手を獲得するのは」とか、そういう枕詞はなしで「お金がないから補強できないんだ」という言葉だけ独り歩きされると、やっぱり J リーグで一番の入場者数のクラブなんですから、その辺は少し違和感があるというのは知っていただきたいと思います。

橋本代表：監督のコメントもクラブとして全文を流すようにしました。それを読んでいただいている方には十分ご理解をいただいていると思いますが、監督も「どういうレベルの選手でも、1人でも取るだけの予算はない」という話は一切言っていないと私は理解しております。そういう特別に高額な選手を取るだけの予算を持っているクラブではないということだと思えます。それがいいかどうかは別として、現時点でのクラブはそういう状況だとお話しさせていただいていると思えますし、そういう認識は、我々三者で統一して持っているつもりです。

来年以降の戦力がどうであるべきかというお話は、既に私は4月24日に就任したわけですが、6月時点ではもう信藤 TD と話し合いを始めてますし、そういった長い目で選手の育成を考えていくべきだろうという意見は、三者とも共通の認識で持っているということだけは、皆様にお伝えしていきたいと思えます。

清尾氏：分かりました。次にファン・サポーターも疑問に思っていることではないかと思えますが、レッズはメディアに取り上げられる機会が他のクラブと比べて多いのですけれども、昨今、特にスポーツ紙の報道内容について、監督が記者会見で行ったことと、ちょっと事実と違うよとか、監督自身が指摘することも少なくないですね。監督がそういうことを言う前に、クラブから「これはちょっと違うんじゃないの」とか、「これは相当事実から離れてるよ」というようなことを、報道機関に申し入れるなどして、ファン・サポーターに対して、「こういうことが報道されましたけど、真実はこういうことです」とフォローしていくことも、やっぱり情報がすごく流れている社会の中では、ファン・サポーターと一丸になって結束していくという部分を考えても大事なことだと思えますが、いかがでしょうか？

橋本代表：私の方からお話しさせていただきます。ご指摘いただいた部分、一部「うん」と首を縦に振るべき内容の指摘もあると思えます。ただ一概に、例えばフィンケ監督が A4 で 10 枚程度のコメントを記者会見の場で言ったときに、その中の 1 行の部分をとらえて、報道をされたときに、これは嘘を書いたわけでもないでしょうし、取り方の違いで、そういう角度から物事をとらえる方法もあるんだらうかと、考えざるを得ない部分もあります

ので、一概にマスコミ、新聞等に出たものに対して、レッズのクラブとして反応すべきかどうかという部分については、慎重に考えていく必要があるだろうと考えています。ただし、レッズの広報部門の強化というのは、必須であるだろうと考えているのも事実であります。例えば監督コメントを、今では全文を載せていますが、そのコメントに対して、追加のレッズとしてのコメントを上げるというようなことも必要だろうと思っていますし、私自身は4月に就任してから5月の時点で、監督を何とかサポートできないかということで、チーム広報のメンバーの増強も図りました。先ほど実はお話はしていませんが、8月1日の組織改正の中でも、広報担当のメンバーを一人増やしたりしています。次長格を一人、広報へ移しました。今後そういった部分に関して、クラブとしてしっかりとした対応が取れるように、改善をしていく努力が必要だろうということで取り組んでいきますので、これは記者の方々とコミュニケーションを取ることからスタートすると私は思っていますので、一方的に新聞記事を批判するというスタンスでは私はないつもりです。

清尾氏：日常的に発表されることが多い信藤さんはいかがですか？

信藤 TD：例えば、今のフィンケ監督が日常で行なっているあらゆることにおいて、このチームが大きくなる確信を僕は持っています。ここで続けていけば必ず大きなものになるっていうときでも、あらゆる面で「結果重視」(の→トル)ということで、「慌てさせられる」という状況は必ず生まれています。そんなときでも、中で信じて戦えなければいけないというのが、我々の仕事だと思っていますけれども、まず一つレッズとして必要なこと、これはメディアにきちんとしたお話をする、これはもう大事なことだと思います。あらゆるところでメディア対応をする、話をきちんとする、そういうことは、今のレッズには必要かなと思っています。

清尾氏：分かりました。クラブからのコメントの形で、監督の会見をフォローしたりというようなことも増えていく、あるいは信藤さんから、もう少し具体的にというかフォローが増えていくということですか？

信藤 TD：そうですね。できることならば前面に立ってやりたいです。とにかく「信藤 TD」と僕の名前が付いていれば、確実に僕がしゃべったことだろうし、そこに関して、補強や契約に関するものすごく深いところは、僕は漏らさないようにしていますし、そこにおいて、どんどんと前面に立って批判も何もここへ持ってきてもらえれば、いいと思っています。それがとても重要で、そうでないと、実際にクラブが何を考えているのかというところが遅れると、いろいろな誤解が生まれていくでしょうし、これはどんどん話をしていきたいと思っています。

清尾氏：それでは、監督の記者会見のときに皆さん、膨大なコメントを読んでらっしゃると思いますけど、さらに読む分が増えるかもしれませんけど(笑)、できればもう少し読みやすくしていただければと思います。私も毎回(監督会見に)出られるわけではないので、出られないときは読ませていただいているんですけど、皆さんに分かってもらうことが一番大切なので、生のコメントは読みやすく、さらにそれにフォローするクラブからのもの

もあるかも知れないということで、今後、お願いしたいと思います。

これだけは聞いてほしいとファン・サポーターから言われた部分がありまして、今年の日本の政治のキーワードは、まるで「ブレないこと」みたいになってます。先ほど代表のお話しの中でも「ブレない」ということがあって頼もしく思ったんですが、クラブは今後もフィンケ監督と今の路線を支え続けるというように判断してよろしいのですか？

橋本代表：結構です。

清尾氏：ということで、日本の総理大臣もそうですけど、そもそも「1年で結果を出せ」というのが無茶な話ですからね。

信藤 TD：ちょっといいですか。皆さん、確かに今連敗しています。でもこの時期こそが次に向けて、大きくなる、糧になると思います。確信しています。確かに埼玉スタジアムへ行って負けたときの辛さっていうのは存分に分かります。ただし、今ここを乗り越えていくことが、若い選手が多くなっている現在、大事なことだと思います。実際にチームは大きく変わっています。これは若い選手を起用しているという事だけではないと思いますね。いろんな形で、日々の生活や、習慣、それからトレーニングのセッションの内容、目的、意識などが変わってきています。だから目の前の、目先のことだけ取り上げるんじゃなくて、今まで変わってきた、もっと変えていくために我々も努力をしていきますので、今のフィンケ監督のチーム作り、これを続けて、ブレないでサポートしていきますので、どうぞ皆さん、応援してください。

橋本代表：成果をぜひ、一緒になって見ていただきたいと思います。よろしくお願ひします。

※掲載内容は、実際の発言の主旨を変えない範囲で、変更している箇所があります